

氏名	白石 綾奈
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第23号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 近代都市と孤独 —身体拡張としての絵画表現—
	研究作品題目 「night light」F200号 2590mm×1940mm 「highway」150号 1750mm×2200mm 「Rain noise」S40号 1000mm×1000mm
論文審査委員	主査 教授 北田 克己 副査 教授 岡田 眞治 副査 准教授 岩永 てるみ 外部 東京大学大学院総合文化研究科 審査委員 教授 加治屋 健司

1 学位論文の要旨

筆者にとって絵を描くことは、社会的な繋がりを得るための手段である。

情報過多な現代は、便利である一方、必要以上のものまで取り込んでしまう側面がある。そのような現代社会に疲弊した時、ふと深夜に立ち寄ったコンビニエンスストアの灯りに安心感を抱いた。この時の経験が深夜の都市風景を描き起こすための原動力となっている。

筆者は深夜に静けさを求めて都市を出歩くが、孤独を求めているわけではない。矛盾するようだが、人との繋がりを保ちつつも孤立しない、自身にとって一番居心地のいい場所を求めて出歩いているのである。その際に、風景から必要な情報だけを選び、絵画を描くことで自分と都市との関係性を表現することができると考えている。

本研究の目的は、自分と都市との関係性を絵画にすることで実存させるという行為そのものに着眼し、その意味を模索していくことで、より絵画表現の可能性を見出していく。筆者は近代都市をモチーフとしており、都市に対する自身の複雑な感情を絵画として表現することを試みている。

第1章ではまず自身の作品と都市に対する思いの経緯を説明する。そして、筆者の作品の比較対象として20世紀前半アメリカの都市郊外を主題とした歴史的背景と写実表現について考察する。これにより、都市風景と筆者の関係性について、自身の主観的な観点と、都市からみた自身の存在を明らかにする。その結果、筆者は社会との関係性を自身で認識するための手段として都市風景を描いていること、そして筆者が描いた風景は筆者の身体を通して認識していたことがわかった。第2章では、メルロ＝ポンティの現象学とマーシャル・マクルーハンの「身体の拡張」を通して、自身の内面を絵画に描き起こす行為の意味について考察する。第3章では筆者の制作工程を詳しく分析し、筆者の身体の一部とも言える技法と材料に触れる。それにより、第2章で述べた身体の延長された部分がどのように機能しているか考察し、技法、材料は、外的要素とはいえ内的なものとして切り離しては

考えられない。そして身体そのものではないが、描く行為に常に身体に関係していることがより実感を持った。第4章では本論のまとめと、博士後期課程で制作した筆者の作品解説を記載した。

本研究の審査対象作品として、ガソリンスタンドをモチーフにした作品を制作した。その作品には筆者と同じように見知らぬ他者達への共鳴を思い描いている。

結論として、筆者にとって人の集団や組織に直接参加することが社会と接することを意味せず、同じように見知らぬ他者達たちとの間接的なコンタクトがそれに代わるのである。見知らぬ者との共感を得ることが筆者にとって社会とつながる、あるいは都会を描くということではないかと思う。

2 学位論文審査の要旨

【論文】

申請者はなぜ都市風景を描くのか内省するとともに、その個人的な動機と行為を先行作品と近代思想の中に相対させようとする。論考部分では表現者が感得し作品化することに伴う身体性について現象学的な考察を加えようと試みている。そこでは材料や技法、加えてその用法経験による身体知について取りあげ、多くの示唆的な問題提起を行った。

第1章では、ホッパー、ルシェ、シーガルの作品を分析しつつ、自分の絵画が、近代都市における孤独をテーマとし、社会との距離の感覚を描いていると論じた。第2章では、メルロ＝ポンティとマクルーハンの著作を引用しながら、自分の絵画が、実存的に理解された世界を描いていること、そして、自分の絵画が「身体の延長」として身体と密接に関係していることを考察した。第3章では、自分の絵画制作の過程を考察し、デジタルカメラによる画像を加工して、客観的、普遍的な外観を持つ絵画を制作していること、そして、銀箔を用いて、明確な光と空間をもつ表現を作り出していることを論じた。第4章では、他者と都市の観点から、自分の絵画が描く孤独感が普遍的な意味を持つことを主張しつつ、審査対象の作品や現在研究中の作品の意図を説明した。

本論文は、自らの絵画制作に対する考えを言葉にするために、ホッパー、ルシェ、シーガルといったジャンルの異なる海外の画家・彫刻家の作品を果敢に取り上げ、また、メルロ＝ポンティとマクルーハンといった、必ずしも分かりやすくはない思想家の著作に取り組むなど、意欲的に書かれている。メルロ＝ポンティとマクルーハンの思想についてはさらに理解を深める必要を感じる。また表現を大きく左右する材料技法の選択理由は論旨に関わることから、自作についてさらに詳細な論述がほしかった。

しかしながら自分が夜間にコンビニエンスストアで他者と距離をもちつつも感じた居心地の良さを、ひとつの絵画観にまで高めてまとめ上げた努力の賜物として評価できる。

【作品】

審査作品はいずれも申請者の作画過程において情報が選択され、捨象され、再構築されている。画面の多くは黒色で、限定的な白と銀箔に加えて緑や赤などのビビッドな色彩が空間を引き締め、都会の均質性や無機質な佇まいを描出する。黒の部分が多いが重苦しさはなく、画面には軽快ささえ与えられ、時に温かな光も感じさせる。

《night light》

どこにでもある大手ガソリンスタンドを道路側からほぼ真正面に捉え、横に広がる構図で描く。深夜の静けさとかすかな人の気配を感じさせる情景である。

《highway》

高速道路の料金所入口の景観を横に水平を意識した構図で描く。新鮮な視点であり静寂な暗い夜間に光るライトや掲示板が印象的である。

《Rain noise》

ガソリンスタンドを斜め方向から捉えパースが効いた構図と屋根の赤い塗装面が印象を支配する。

【口頭発表】

論文の要旨についてスライドを用いて簡潔に発表した。自作の紹介では申請者が込めた心情や実感を述べた。

主題である都市風景は一見して殺風景なありふれた景観であるが、作画過程を通じて洗練され、日本画として再発信された作品は同時代の共感を呼ぶものになるだろう。いずれの主題も申請者の日常生活において接点のある場所であり、社会との距離という内面的な切実さを絵画化していることを示した。その作品は都市の疎外感や孤独のみの表現に留まるものではなく、また表徴的、記号的な都市の表現だけでなく、また写真を用いながらもフォト・ペインティングのような絵画の意味を問い直す立場とは違う独創的な絵画観に立脚している。論文と作品を通じて、申請者が内面に迫る中でその普遍的な意味に気づき、表現の深みへと還元してゆく過程は博士課程における研究の大きな成果だったと認められる。

以上のように、申請者白石綾奈はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

口頭試問では第2章メルロ＝ポンティに触れた記述について申請者自身の言葉で述べるべきであることが質され、適切に改める必要を認識しているとの答えがあった。第4章の今後の研究課題「Flower」シリーズについての質問について、現在のテーマと「切り離すことが出来ない。」と回答があった。その点で曖昧な記述であることが指摘された。

論文執筆を通じてどのように自身が変わったかとの質問には、メルロ＝ポンティなどの思想研究を通じて、個人的な動機を客観視することができ、主題への思いを強くすることになったとの意見を述べた。

その後の審査では、作品の評価は高いものの、完成度がさらに必要であるとの指摘があった。論文についてもメルロ＝ポンティなどについて思想的な理解、考察が十分とは言えないとの意見があった。

上述のように一部課題があるものの作品の高い表現能力と独創性、論文への意欲的な取り組みとともに博士課程を通じて大きな成長、成果に結びついたことを高く評価する意見で一致した。したがって申請者の研究は優秀と認められ、博士の学位を与えるに十分である。